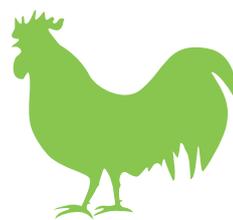


鶏肉



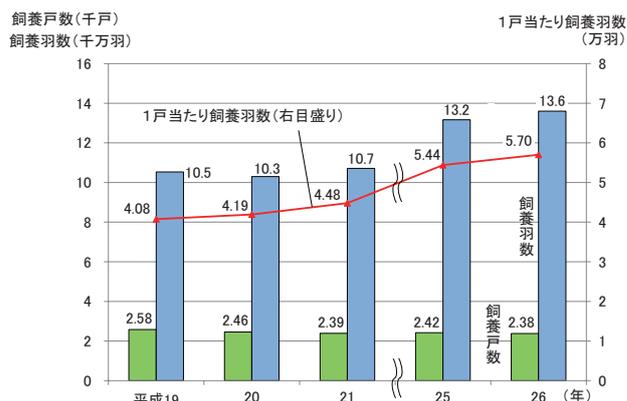
◆飼養動向

26年2月現在のブロイラー飼養羽数、3.1%増加

ブロイラーの飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移しており、平成26年は2380戸（前年比1.7%減）となった。一方、ブロイラーの飼養羽数は、増減を繰り返しながらも、近年は増加傾向で推移しており、26年は1億3600万羽（同3.1%増）となった。この結果、1戸当たりの飼養羽数は5万7000羽（同4.8%増）となった。大手企業によるインテグレーションの進展や生産コストの増加を増羽で補う動きなどと相まって、経営の大規模化による生産の集約傾向が強まっていることがうかがえる（図1）。

※飼養動向については、21年で農林水産省「畜産物流通統計」での公表が終了したことから、22～24年の該当データはない。25、26年においては農林水産省「畜産統計」で公表されているものの、調査方法が異なるため、単純に数値を比較することはできない。

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



資料：農林水産省「畜産物流通統計」、「畜産統計」

注1：数値は各年の2月1日現在、21年までは「畜産物流通統計」、25年以降は「畜産統計」を用いた。22～24年の間は調査は行われていない。

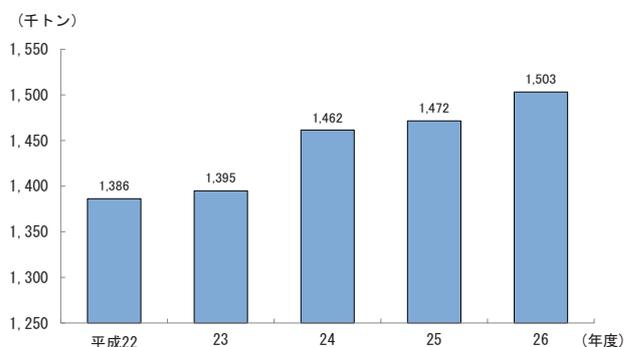
注2：平成27年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

◆生産

26年度の鶏肉生産量、150万トンを超え過去最高を更新

鶏肉の生産量は、消費者の経済性志向の高まりや平成20年度の中国産冷凍ギョーザ事件を受けた国産志向の高まりなどを反映して、増加傾向で推移している。24年度は、増体能力の高い品種への切り替えや配合飼料価格などの生産コストの増加による収益減を増羽で補う動きと相まって、146万2000トン（前年度比4.8%増）とやや増加した。25年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、147万2000トン（同0.7%増）とわずかに増加した。26年度も引き続き、この傾向が継続したことから、150万300トン（同2.1%増）とわずかに増加し、過去最高を更新した（図2）。

図2 鶏肉の生産量



資料：農畜産業振興機構調べ

注：骨付き肉ベース。

◆輸 入

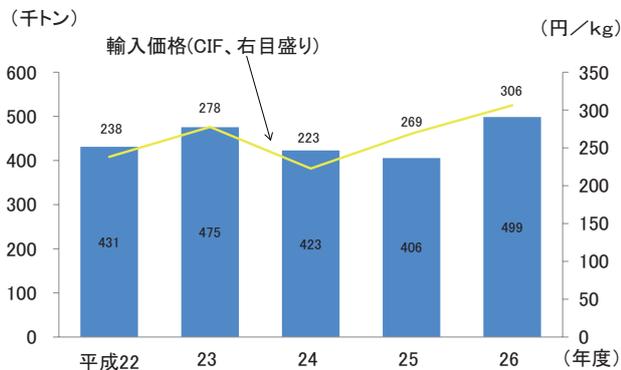
26年度の鶏肉輸入量、22.9%増加

鶏肉

生鮮の鶏肉は消費期限が短いことから、輸入品の大半は主に加工・業務用向けに利用される冷凍品である。

輸入量は、平成24年度は、現地相場高や東日本大震災の影響による国産品不足に対応するため、輸入量が増加した23年度の反動もあり、42万2900トン（前年度比11.0%減）とかなり大きく減少した。25年度も、飼料価格高や人件費の上昇による現地価格の高止まり、為替の円安傾向などの影響を受けて、40万5500トン（同4.1%減）とやや減少した。26年度は、加工・業務用需要の増加や25年末（25年12月25日付）にタイ産の輸入停止措置が解除されたことなどを背景に、49万8700トン（同22.9%増）と大幅に増加した（図3）。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格



資料：財務省「貿易統計」
注1：実量ベース。
2：生鮮、冷蔵品を除く。

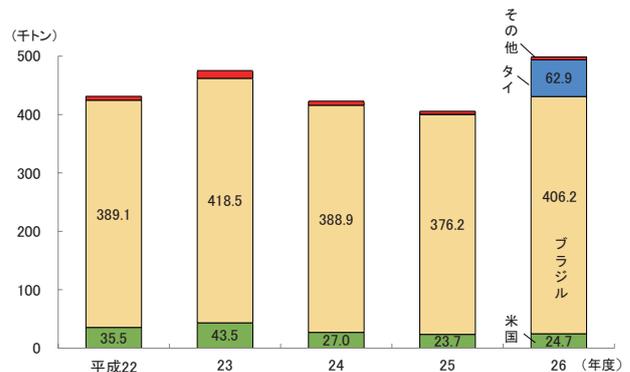
国別に見ると、全体の約8割を占めるブラジルが最大の供給国であり、タイ、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、26年度は、加工・業務用需要の増加により、40万6200トン（同8.0%増）と、かなりの程度増加した。

16年1月の高病原性鳥インフルエンザ発生に伴う輸入停止措置以降、およそ10年ぶりに輸入停止措置解除となったタイからの輸入量は、規格の正確性を求める業務筋からの需要増の動きが見られ、6万2900トン（皆増）と増加した。

米国からの輸入量は、17年度以降、高病原性鳥インフルエンザの発生により、たびたび輸入停止措置がとられたため、2万トン台が続いている。24年度は、東日本大震災の影響のあった23年度の反動から2万7000トン（同37.9%減）と減少に転じた。25年度は、鶏肉調製品の輸入量の増加の影響により、2万3700トン（同12.3%減）と前年度に引き続き、かなり大きく減少した。26年度は、2万4700トン（同4.6%増）とやや増加した（図4）。

図4 鶏肉の国別輸入量

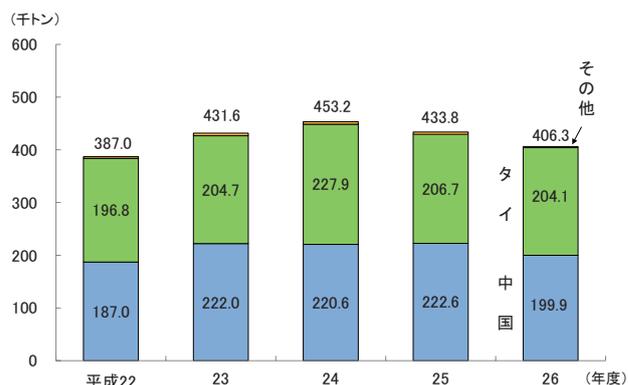


資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

鶏肉調製品

鶏肉調製品（加熱処理などされた唐揚げ、焼き鳥、チキンナゲットなど）は、主に加熱処理施設が多数存在する中国、タイから輸入されている。輸入量は、近年、食の外部化（外食、中食など）の進展や主要輸入相手国における高病原性鳥インフルエンザの発生などを背景に、増加傾向で推移しており、24年度は、安い素材を求める業務用需要の増加を反映し、45万3200トン（同5.0%増）と、やや増加した。しかし、25年度は、飼料価格高や人件費の上昇による現地価格の上昇、為替の円安傾向などの影響を受けて、43万3800トン（同4.3%減）とやや減少した。26年度も、7月に中国産「消費期限切れ鶏肉」問題が発生した影響により、中国からの輸入量が減少し、最終的に40万6300トン（同6.3%減）とかなりの程度減少した（図5）。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」

注：関税率番号 1602-32-290（基本関税率 8.0%、但し、WTO加盟国（中国）は 6.0%、EPA締結国（タイ）は 3.0%）。

◆消費

26年度の推定出回り量は3.6%増加、家計消費は2.0%増加

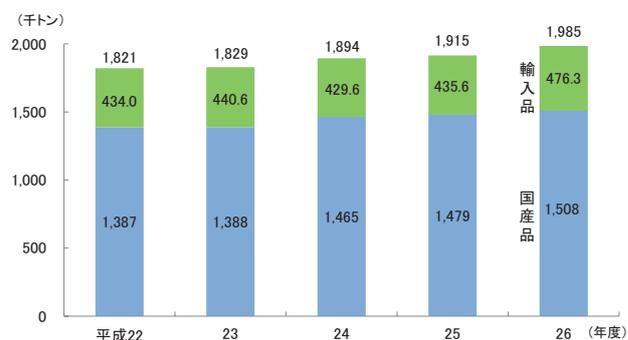
鶏肉の推定出回り量は、近年、他の食肉に対する価格優位性に支えられた需要増大や消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

全体の8割弱を占める国産品は、中国産「消費期限切れ鶏肉」問題が発生した影響を背景とした消費者の国産志向の高まりなどを受けて、増加傾向で推移しており、26年度は150万8000トン（同1.9%増）となった。

一方、輸入品は、鶏肉調製品との競合や現地相場の変動などにより、43～44万トン程度で推移していたが、26年度は、加工・業務用需要の高まりから輸入量が増加したことにより、47万6300トン（同9.3%増）とかなりの程度増加した（図6）。

この結果、平成26年度は、198万5000トン（前年度比3.6%増）とやや増加し、過去最高を更新した。

図6 鶏肉の推定出回り量



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」より農畜産業振興機構で推計
注：実量ベース。

家計消費

鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、他の食肉に対する価格優位性や消費者の健康志向を反映し、堅調に推移している。24年度は消費者の根強い経済性志向を反映し年間1人当たり4.8キログラム（同3.2%増）、25年度は同5.0キログラム（同5.6%増）、26年度は同5.1キログラム（同2.0%増）と4年連続の増加となった（図7）。

図7 鶏肉の家計消費量（年間1人当たり）



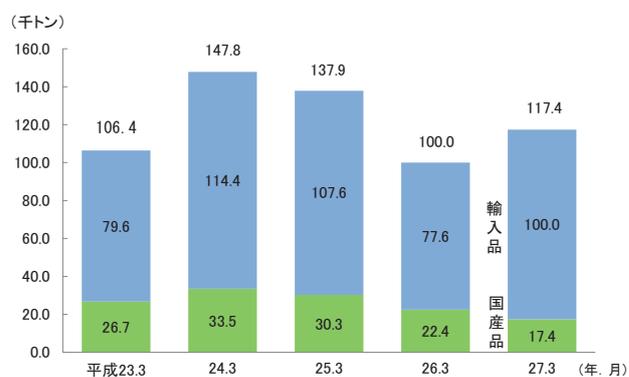
資料：総務省「家計調査報告」

◆在庫

26年度の推定期末在庫量、17.3%増加

鶏肉の推定期末在庫量は、その8割以上を輸入品が占めることから、輸入量の変動に大きく左右される。平成24年度は、鶏肉調製品の輸入量の増加や高水準であった期首在庫量を反映し、輸入量が減少に転じたことから、13万7900トン（前年度比6.7%減）とかなりの程度減少した。25年度も、現地価格の高止まりなどにより輸入量が減少したほか、加工用需要の増加などを受けて、10万トン（同27.5%減）と大幅に減少した。26年度は、国産品が減少する一方で、輸入品が増加した結果、11万7400トン（同17.3%増）と大幅に増加した（図8）。

図8 鶏肉の推定期末在庫量



資料：農畜産業振興機構調べ

◆卸売価格

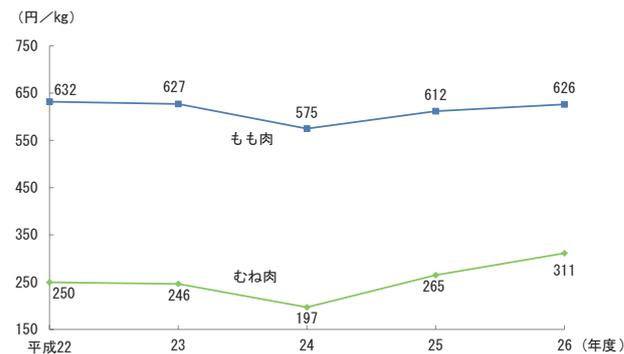
26年度の鶏肉卸売価格、むね肉は46円高の1キログラム当たり311円

国産鶏肉の卸売価格（ブローラー卸売価格・東京）のうち、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」については、平成24年度は、供給量が多かったことから、1キログラム当たり575円（前年度比8.3%安）とかなりの程度低下した。25年度は、年度後半の在庫量の減少や現地相場高や為替の円安傾向による輸入量の減少に加え、猛暑の影響や年末需要の増加を受けて、同612円（同6.4%高）とかなりの程度上昇した。26年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、同626円（同2.4%高）とわずかに上昇した。

一方、蒸し鶏などの総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用の多い「むね肉」は、もも肉同様、24年度は、同197円（同20.0%安）と大幅に低下した。しかし、25年度は、コンビニエンスストアの総菜原料など加工・業務用需要の増加により回復基調で推移し、同265円（同34.5%高）と大幅に

上昇した。26年度も引き続き、加工・業務用需要が旺盛だったことから同311円（同17.5%高）と大幅に上昇した（図9）。

図9 国産鶏肉の卸売価格



資料：農林水産省「食鳥市況情報」、「ブローラー卸売価格」

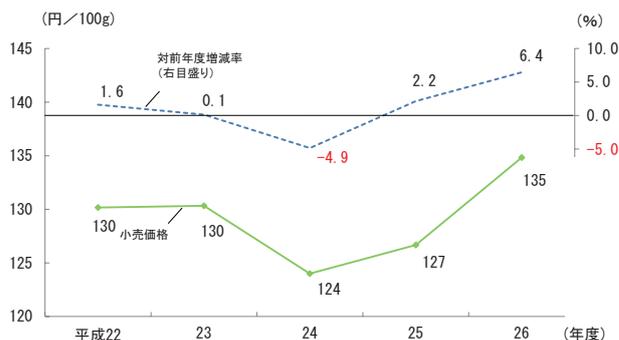
注：消費税を含まない。

◆小売価格

26年度の小売価格（もも肉）、6.4%上昇

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、平成24年度は、生産量が増加したことから、100グラム当たり124円（前年度比4.9%安）とやや低下した。25年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、同127円（同2.2%高）とわずかに上昇した。26年度もこの傾向が継続して推移したことから同135円（同6.4%高）とかなりの程度上昇した（図10）。

図10 鶏肉の小売価格（もも肉・東京）



資料：総務省「小売物価統計調査報告」

注：消費税を含む。